山とスキー

第四十一號

札幌 山とスキーの會 發行

◇本誌は創刊號より秩父宮殿下の御愛讀を得てをります◇

第四十一號目次

記事

詩
五月の奥山盆地　富田碎花〔一〕
オスロとクリスチアニヤ　藤江永次〔二〕
平原の上に聳ゆる山　大島亮吉〔七〕
平藏の話　マツストヘンゲル
技術の進歩と體力　岡村源太郎〔一一〕
夏街所感　〔一五〕
山地に於ける方向決定の方法　阪本丁次譯〔二三〕
國際スキー聯盟規約　〔三〇〕
彙報抄錄
〔穗高のクレツテライ・北海道中央高地地形圖出版・新刊二著〕

圖版

表紙　アドルフ・クンスト作
挿畫　エドウイン・ヘーネル作

大正十三年九月發行

試みに地上三千米突ほどの邊を劃ぎつて
霧で、それ以下を閉ぢて見やう、
私がいま立つてゐる絶嶺は、島のやうなもの、
此の邊の山彙は
まあ群島だね、
一寸、海の底の人間の世界のことを考へて見やうか、

——いや
さても考へられないほどそれは遠い遠い世界のやうな氣がする、
だが、待つて呉れ、私のたましひがそこから香煙のやうに
一縷高く炷かれてのぼつて來てゐるのを忘れてはいけない。

——富田碎花——

五月の奥山盆地〔二〕

藤江永次

化雲岳附近

化雲岳は人々によつてその位置を異にしてゐる樣だ。一つはカウンナイの上流にあたり、忠別川の崖に沿ふた小高い所で頂上から忠別側へ向つて直に斷崖になつてをり、その最高部には可成大きな岩があり、その傍には三角點がある。

トムラウシより來る尾根と、忠別岳の方へ向ふ尾根とは此處で合してゐる。もう一方は先に化雲岳として書いた處のもので カウンナイを隔てゝトムラウシに對してゐる獨立した圓頂でこゝにも三角點がある。この前者と後者との距離は約一里位である、それでどちらを化雲岳とも斷定し難いが私達は前者を化雲岩と稱し、後者を化雲岳といつてゐる。

化雲岳から忠別岳へかけての尾根は即ち忠別の爆裂火口の壁であつて成因から考へても、弧狀をなしてをることは明である。而して一方は殆ど直下に水の流を見ながら音すら聞きとり得ない程の深い崖になつてをり、一方の、カウンナイ側及石狩側は緩な傾斜をなしてゐる。

この尾根はまだ、一面の雪であつた、左側のその物凄い雪庇は虞らく崖の續く限りあるだらう。冬の悌をしのぶに足るものでそぞろに私達五人の者の魂を戰かさずには措なかつた。何等さまたぐるものゝないこの尾根の歩行は至極樂だつた尾根から尾根へと限なき雪の連續がやがては霞の中へ消て行き、浮城の如き石狩岳や、夕陽に血のように反射した部分や

青く影ずんでゐる處がはつきりと區別されてゐる。トムラウシの氷雪は何よりの憩ひであつた。(夏期この尾根は松山温泉より、石狩岳へ行く時に通るのであつて、所々にある倭小な樅松と、苔類ばかりで樂な道で假令ガスに包まれても一方は崖であり、且百間毎に御料と官林との境界の標柱があるから敢て困難な處ではない。)

ヌタプヤムペツ

化雲岳から石狩岳へは五色ヶ原、沼ノ原などを通つて尾根傳ひに行くことが出來る。併しこの通は積雪期に限るのであつて、夏期は沼地やブツシュのため通過不可能な處である。この融雪期に於て、增水せる川を渡渉すること、五月と言へどもまだ粉雪にさへ出遇ふことのあるこの寒い所にて、しかもスキーを使用するため靴を濡すことを躊れてゐた私達は始にこの尾根により石狩岳へ取付く豫定であつたが、この尾根には、適當な地點に、露營地を見出し得ないことや、又案外の暖さと、ヌタプヤムペツの積雪狀態を知り得て、この澤を降ることにした。

ヌタプヤムペツの澤頭は樅松や笹など密生し、夏期に於ては水を認むる處まで行くには可也の時間を要するも、五月の積雪時には全く唯の一滑りだつた。忠別岳から五色ヶ原へかけての廣い部分の水は、丁度漏斗の口の如く、ヌタプヤムペツへ吸ひ込まれて行くのである。

夕方近くの淡いフィルムクラストにコオドリした友は口々に歌ひながら三ツ四ツ、シュプールを交へて、見る見る小さくなつて漏斗の口へ滑り込んで行くのである、全くあのまゝ消えて行くのではないかと思はれた。それに引き換へ、一歩は高く、一歩は低くぬかりながらも正直に、シュプールに從つて降つて行く、人天の姿が哀れだつた。

ヌタプヤムペツの積雪は非常に豊富だつた。澤頭から約一里位の間は、全く雪に覆れてゐた。上流は五色ヶ原側が比較的急傾斜にて、崩の危險を思はれる處も二三箇所あつたがそれも、對岸を通ることにより充分避け得られる。

三、四間の瀧もあつたが殆んど意識せない位にまで雪が積つてゐた。森林帶も余程深くなつてから流の上を覆ふ雪はなくなつた。しかし漸く兩岸の開けたこの邊ではどちらをとるのも敢て困難な路ではない。唯折々見る熊の足跡に互の視線を集めるだけだつた。石狩川の本流に近く、奥山盆地の中央部に進むに從ひ、雪は段々淺くなつて行くようだつた。

流石の奥山盆地にも最早春の訪は來てゐたのだ。花咲くことばかりが春ではない。この深山の雪の上にも亦春はある。

3

今日の行程こそ如何にも春のシーロイファーに相應しいものであらう。暖く、まばゆい陽光を体一ぱいに浴びながら時々用ふる杖の力で曲り曲つた澤を下へ下へと、止度もなく滑り降りて行くのである。釣の好きなTやKは早この美しい雪解の水底に僅に木の間を通してもれてくる春光にその影をうつしてゐる岩魚を見ては無上に喜んでゐる。冬眠を破つた熊も彼等の世界が再び開かれると共に、又彼等の餌を求めて彷ひ歩むのだ。何等内面的の價値のない、しかも目まぐるはしいことにのみ惱され下等な藝術に吾眼吾耳を徒に刺戟されることに堪へかねて、大自然の藝術のうちに懷れ又、氷と岩とを求めて峰から峰へとさまよひ歩むのは私達の樣な無識なベルグシュタイガーにも、それが心の飛躍であり、魂の餌であることを感ぜずにはをられないのである。ヌタブヤムペツを降るには夏期でも七時間とは要しない程の澤ではあるがこの時は四時間ばかりで本流へ出ることを得た。ヌタブヤムペツの落口から石狩澤の落口までは譯なく右岸を傳ふて達せられた。幸ひ雪のない處を得て露營す。

石狩岳へ

この雪解の增水期に於て、殊に夏期に於てさへ水量の多い石狩川の渡渉は非常に困難なと云ふより寧ろ危險とする處であるが幸ひ、この奥山盆地、即石狩川沿岸は林相よく、北海道にても模範林と言はるゝ處であつて、針葉樹の巨木が成長し得る限りの程度に於て密生せる故、又中の島を利用し之等の巨木を切り伐して架橋することによつて、何等の危險を感ずることなく、渡渉し得たのである。

オスロとクリスチアニア

外電の報ずるところによればノルウエーの首都クリスチアニアはオスロと改稱せらるゝと云ふことである。クリスチアニアなる名稱はノルウエーの首都であると共に、スキーテクニツクの上では、テレマークと共に双璧たるスウイングの名稱であつて、既に初めてスキーを穿いた時から、印象深いもので且つ實際此の技をやるに於ては、終生忘るゝこゝの出來ぬ快味を有するものである。こうした意味に於てクリスチアニアなる言葉は、スキーランナーには日に口にせられざるなきものであ

石狩岳へ行くには、登路の狀態に於て又時間の點に於て、石狩澤を登るのが最も普通の道であるが、その危險率の少い點から言へば、前石狩澤を登ることだと思ふ。前石狩澤は、その澤の傾斜も緩く、且澤頭から石狩岳の頂上へも二十度前後の美しい斜面のお花畑によつて續いてゐる。この登路による時は頂上へ達するまでに、吹ざらしの部分も極く少く且森林帶も深く入つてゐる故、冬期に於ける石狩岳登山にはこの登路を最も適當なものと思ふ。

單に登るといふことより或特種の努力を拂つて、登るためには大石狩澤が面白い、しかし之も敢て困難な處ではない。

私達は色々の都合により、本流から日返の豫定で石狩澤を登ることにした。愈々石狩岳へ向ふといふそれすら私達には限ない喜悅を感じさすものを、昨夜からの急激な寒氣に、今日こそは、あの氷の蜂にしがみ付いてくれんものと言ひ知れぬ緊張さを五つの面に浮べながら黎明の光がまだこの靜な奥山盆地には訪れない前に起き出て、薄暗いラテルネを賴に次から次へと用意が調へられシュタイグアイゼンの打合ふ音すら全身の筋肉の一つ一つに反響するように思れた。見上ぐるばかりの高い峰には既に朝日に物凄い雪の動搖が認められる位になつた。

「行かう」と友の聲に皆は立上つた。そして一人一人靜に歩み行く友の姿を見送りながら、私も亦ピッケルを片手に、そしてあの青白い氷雪の面で私達五個の生命を確り結へてくれる、幾卷にもなつたザイルを肩にした時高まる脈動を暫し如何とも爲難かつた。

昨夜からの寒さに石狩澤の雪は堅くなつてゐた。澤頭の急傾斜も、アイゼンが氣持よく食入るまゝにぐんぐん登つて二時間ばかりで澤を極めることが

出る。

スキーテクニツクとしてのクリスチアニアが、ノルウエーの首都としてのクリスチアニアと如何の關係あるか、吾人未だ寡聞にして、何人か、何日この技に對してクリスチアニアなる稱呼を附したるかを知らないが、今度首都の名稱が變ることによつて、まさか技の名稱も變ると云ふことはあるまい。

そこでこれからは、クリスチアニアと云ふ發音はたゞ、吾々の生活に於てはスキーのあの壯快極りなきシュヴングの一こして殘り、をそらく、とことはにスキーが存し、そのシュプールが世界の積雪地にあまねき限り、傳へらるゝことであらふ。

（君　一）

來た。

石狩澤は直接に石狩岳から發してゐるのではなく、石狩岳から石狩川の本流へ向つて發した一つの尾根の中部から出た澤であつて、寧ろ石狩澤と名付ゐるのは不適當のようにも思はれる。夫れ故石狩澤は案外短いのであるが、澤頭から石狩岳までは案外長いのである。

澤を終へて尾根傳ひとなる頃から猛烈な吹雪になつて來た、雪は全く凍つて、アイゼンの齒もたゝない部分もあつた。この尾根は、前石狩澤と、大石狩澤、石狩澤との境をなし、前石狩澤側の斜面は著しく積雪多く、大きな雪庇さへある。それに比し、反對側の斜面は甚だ積雪少く、既に偃松の起きてゐる部分も少くなかつた。之は常にヌタック方面から風が吹きつけてゐるためにかゝる積雪の差を生じたことはその雪庇の位置によつても明である。

展望は勿論先頭と最後との間にても見通すことの出來ないこともあつた。しかし私達の熾烈な望は尙怠ることなく努力を續けてゐるのである。折角作つて行つたステップも次から次へ降り積る新雪のため消されて行つた。一つ一つのステップすら皆魂の叫と弱い私達の筋肉から出た芳しき努力の結晶なのである。

吹雪は益々强くなつて來た。そして全く如何に頂上へ近きつゝあるかを知ることも出來なかつた。唯私達は石狩澤の澤頭より尾根傳に約二時間の登行を行つたといふ時間的にしかその位置を知り得なかつた。

己むなく引返さざるを得ないまでに吹雪は烈しくなつた。

冬そのまゝの景色に喜びながらアイゼンに附いた新雪を拂ひ拂ひ露營地へ降りて來たのはまだ十二時過だつた。

流石に奥山盆地は靜かだつた。吹雪に追返されて來た私達にはくそ落着に落着いてゐるようにも見えた、唯石狩川の水が著しく減つたことが目についた。こゝでは天國は荒れてゐても下界は靜なのである。時々落ちる松の露も一時に數多くではなかつた。

平原の上に聳ゆる山

西ヌプカウシヌプリ

大島亮吉

草短い斜面をのぼる一歩ごとに、私等の視野は次第に展け擴がりゆき、遠くみはるかにまで恰も海のごとくに低い丘陵の波のゆるやかにうねり打ちつゞく廣濶なる平原の展望が、徐々としてひらけてくる。その草の山腹をのぼり終つて、ほどもなく、私等はその平たい頂の草原のうへに腰を下した。

それは日の暮るゝにも間近き眞夏の午後であつた。そしてその平原とはかの十勝の大平野であつた。その頂とはその曠野の濶やかな胸に位ひした東西の双兒峰のひとつ、西ヌプカウシヌプリの頂であつた。

ヌプカウシヌプリ——それはアイヌ語の山名にて、洵にその意義は「平原の上に聳ゆる山」と謂ふと。私等が眞實この十勝の平野に立つて、この山をその北のかた、平野の胸とも呼ぶべき位置に望んだとき、私は感嘆した。まさにこの東西兩ヌプカウシヌプリは、平原の上に聳ゆる山であり、そしてまたかの然別沼のひと知れぬ暗き水影を取卷き、かくし抱く山地への高く、そして顯著なる、恰も大地の二つの門柱である。あのいまなほ原始的な古種族の名づけたこの山の名のいかにゆかしく、そして眞實さをもつことだらう。彼等のそのナイーブな、素直な態度には愛でたき感じをもたずにはゐられぬものがある。

その西ヌプカウシヌプリの頂よりの展望——それはこれまで私のいまだそのたぐひをみないほど廣やかで、そしておほ

らかなものであつた。この頂はその高さ、わづかに千二百餘米ではあつたれど、全山ほとんど草山にて、平原の坦かなる底の方よりしては凡そ千米突も高まつてゐた。恰も夏のまさかりの、しかも一日の最後の美はしくも、眩ゆき黄金の光りのもと、私等は永い間この頂の草に座したまゝ、その宏大にして嚴かな展望と頂の愉しき休息とに心ゆくまゝ時を費したのであつた。

太陽はまさに大地の闊を越えんとして、右手迥の方に連り亘る日高の嶮しく聳える峯々のうへなる一抹の雲をば火燄のごとく熱し灼やかしつゝあつた。いま私等が前に、このヌプカウシヌプリの山麓より、右手は日高のみはるかなる峯々の山裾までに限られて、前面は遠く廣濶として遮るものなく打ちひらくその十勝平野の宏やかな大景、それはまさにその平原の全き面を私等の視域に與へてゐるのである。平原と山波との美しき諧調によりて組合せなりたつ大地の、こゝによりて存在し、またこゝに自らの心を見出すといふ地點こそは、おそらくこのごとき高みの一點ではあるまいか。そしてこゝにきてこゝを占めるものは、また低きを望み、高きを仰いで思ひを他にうつすことなく己が心をば眞實に把握し得るのではあるまいか。

平原の面、その眼近くは波うつ丘陵の淡き緑に、そのなかのやゝ濃き斑點はあの槲の林である。そしてより遠ざかりては次第に青ずみて、斑らに黑きをのこし、その果は空の淡青と大地の淡黑とがひとつの定かならぬ色に融けあつてゐる。そしてその面を然別や音更や、あるひは十勝川の水脈が恰も大地の血脈かのごとくに、眩ゆき白銀色に燦めいてその流れゆく行末を示す。友等ははるか平原のそのたゞなかにわづかに白くほの光る一點を指さして、彼處こそはこの平野の中心都會たる帶廣、まぢか山裾の波うち丘陵と谷いくつ越えゆくかなた、緑なすそのなかに光る白き二三の斑らの點在するのが、これより私等の行きつくべき賣幕の開墾村であると、その村に住ひする私等の人夫のひとりなる若者より敎はりきいてゐる。そして彼れはなほもその曠野の表面に點々として散り布く黑き斑點こそ、これまで人々の手によつて墾かれ耕された耕地であると附けくはへ言ふ。

私は想つた。この廣濶なる荒野のたゞなかにあつて只管汗をもつてそれを墾き耕す開墾者のその地にまでいたせし力のあとを。この高みより見下ろせば、たゞその黑き斑點としてのみ望まるゝものが、この荒野の廣袤に對してこれまで撓みなくなされた彼等の努力のあとであるのか。彼等この曠野の開墾民のその貧しくして、酬ひらるゝところ寡き生活を、す

でに私は旅人の眼をもつてその戸の外から覗きみてきてゐる。そしてそれのみならず、なほもまた私等は彼等のなかのひとりなるわが若者の言葉を通じて、その戸を開きて入りたる暗き戸内のものについても尠からず聽いてゐた。洵に彼等開墾民のその生活の全部は、人のけなげなる土との闘ひの生活記錄にほかならないとおもふ。「土に親しむ生活」と言ふそれはたゞ都會居住者がある微溫なる田園の生活をみての聲である。そしてまたかの小說「エミール」を讀みたるものゝおもふあの粗き自然のなかの心自由なる開墾者の眞實味ある生活をも、こゝにあてはめることは出來ないとおもふ。彼等の生活はまことに「土それのみ」ではあるまいか。

荒野に立つ開墾者の眼には永遠が聳えてゐる。彼等は彼等自らの汗の勞働に依つて一寸づゝその土地を墾きひろめてゆく。地もまた撓まぬこの思ひ執したものゝ手のなかに、少しづゝ身を委ねてゆく。地より生れた人の子が、地よりその飲みものを得んとして、この潤やかな地の胸を求めたことも空ではないのであらう。荒野の瘠せたるその面は終ひにはその涯に到るまでも、黑々とした肥えたる耕地とかへらるゝ時もあるひは來ることであらう。そしてまたあるひはこの荒野の往昔の暗い地はあとかたもなくかくれて、豐饒な田野となり、そこに黃金に色づく宏やかな收穫のうへに太陽の光りの平安に輝くのをみることもあり得やうとも、しかもなほ彼等の望む幸福なる十全の世界は、穀粒の穗より滴れ布く地の遠くかなたにあると思ふ——彼等が彼等自らの心のなかの荒野をば墾き終らないかぎりは。

傍觀者であるべき一個の旅人は、それらの人々にまで敢へてこれだけのむだごとをこの高所より、彼等が地になせし眞實なる力のあとを指さしうち眺めつゝ、彼等におくることゝする。

平原の展望より眼を後の方にとうつせば、そこには私等の幾日かをおくりきたつた、あの樹木は鬱蒼として茂りあひ、谷々深くして未開なる山々の重疊たる遠景がある。その樹々に黑く蔽はれた原始なる山々の押重なり横たはるなかに、ひと際高く聳ゆる二、三條の雪の襞を刻む山の容こそは、私等のその頂まぢかの肩をこえきたウペペサンケヌプリである。ウペペサンケヌプリとは「雪水を流す山」の謂ひであるこ。こゝにもまた私等はこの北地の古き種族の地名をなづくるときの素朴な、そして詩的な態度のゆかしさを知る。アイヌ語についてのトポニミイは、北海道を旅するものゝひとつの奧ゆかしい愉しみではあるまいか。

谷より渦卷き湧き上る薄暮の雲は、音更と十勝川の水上の山々のすべてを蔽ひかくして、たゞその間に一抹ヌタクカム

ウシュペの雪光るを垣間見るだけである。そしてま近くには、流れもゆるやかな、かのヤンペッの流域や、あるひは寂しい、そして陰暗い然別沼の水光が冷やかに私等の眼にも靜かに映りくる。北海道の山湖のうち、この然別沼ほど私に幽暗なおもひを抱かせたものはなかつた。

黄昏のせまりくるにつれ、彼處、一日の最後のその榮光に、かの日高の峯々のうへなる夕燒雲はます〳〵赫焉として灼き燃えて、この平野の大いなる展望をしてひと際嚴かなものたらしめた。暮るゝにおそき北地の夏なれど、もはや私等にはこの頂をおりてゆかねばならぬ時となつた。

おもへば私等も今日この頂にのぼりて、平原へとくだれば、漸く私等が幾日かの山々のさすらひ歩きを終へらるゝことゝなるのであつた。この頂のこの稀れなる宏大な展望と、一日のうちこの限られたる美しく、そして嚴かな時との合致は私等のもつた幾日かゝの彼の深き、そして原始なる山々のなかにつひやされたそのうち濡れた、そしてはげしい疲れの日に對する最後の慰めとしては充分である。いま私等はもうあの陰濕な谷々の奥深きなかで、昨日の疲れも意にとめることなく、また明日の不安にも煩はさるゝことなく、この印象深いひと時をもつことが、出來るのである。私はこの時、自らの心胸内に強くあるひとつの想ひを浮べもつことが出來た。「まこと私等が日常の都會に於ける文明生活は疑ひもなく多くのものを私等に敎へてくれる。けれど若し私等がひとたびこの山々のなかで送らるゝ何等の形式もない、自由なそして簡素な生活の眞實さを味つたならば、またそこには自ら別個なるひとつの想ひを把握し得ることゝ思ふ。嵐や雨、或ひは寒さや時には飢えと私等がたゝかつて、私等がたゞ單に私等の生命を維持してゆくのみに過ぎないと言ふことは——即ち生命の單なる存在と言ふことは、全く價値つける以上のものであると言ふことを敎へて呉れると思ふ。」そしてまた私この時ほど次なる言葉を深く思つたことはない。

「若しも貴君等が貴君等自身の力によつて、ひとつのよりよい生活を得ようと希ふのならば、私はお勸めする。貴君等は貴君等のその日常の變化に乏しい、單なる營みのみの生活のなかへ、他の多くの愛しき想ひと共に、時には山々の高き谷々を領してゐるその深い、そして穩かな平和さと、白き峰の氣高いその靜謐さと、そしてなほそのうえに、終ることのないさすらひ歩きと幾度繰返してもいつもまた始めてゞあるやうな思ひを與へて呉れる登山とに對する強い希望とをとりいれなさることを。」

エミール・ジャベル

私等は忙しく頂の草のうえから立ちあがつて、急ぎつゝ急な草の斜面をまつしぐらに平原へと下りはじめた。あの丘と丘とのあひだにある寥しいそじていかにも殺風景な開墾地の村——賣幕市街へと。

大正十二年七月中旬、十勝川の一支流なる然別川の上流シーシカリペツおよび十勝川の同じく一大支流なる音更川の一側流ホロカオトプケの水上をなす谷々のなかをさまよひ歩き、更に内胎川(ないたい)をさかのぼりてヤンペツの流れをくだり、然別沼の水邊に時を送りて、同七月二十三日の午後、西ヌプカウシヌプリの頂に立つ。

平藏の話

マワストヘンゲル

——山へ登ると云ふ事は無暗に面白いそして樂しい事である。山へ登る道々の草や木、虫や鳥。山の上から見た景色。そんな事は言はなくつても判りきつた事である。それどころか自分には爪尖登りの田舍の小路でも充分樂しみが湧いて來る。此の路を登つて、行きつめた坂の上にはどんな美しい景色が自分を待つて呉れてるだらう、等の期待をもつて行く、そして色々とその風景を想像しながら登つて行く。而も登りつめた坂の上で自分を待つて〻呉れた景色が、假令泥溝と豚小屋だつたつて、自分はその坂を登りながら想像して居た事だけで滿足する。それ程山は良いものである。——

こんな意味の事をジョン・ラスキンとか云ふ人が書いたのを讀んだ男が居る。尤も讀んだでなく讀まされたんではあるが、そしてまさか、泥溝だとか豚小屋だとか云ふ樣な下等な文字は無かつたが、兎に角、こ

んな意味を英語の教科書でならつたその氣紛れな男は、全く驚いた。そんなに山は面白いものかなと考へたが、いくら、田舍の小さな坂を登つたつて、ジョン・ラスキンとか云ふ哲學者の樣には想像出來なかつた。

●●

氣紛れで物好きで、そして人のあらをよくさがしたがる此の男は一つ本物の山登りをしてラスキンの云ふ事が本眞かどうかを試みやうとした。本物の山へ登つて猶ほラスキンの云つた樣に想像出來ないんなら、確にラスキンは大法螺吹であると云ふ結論を下し得られるものと考へたからであらう。

そしてその男の選んだ山は越中の立山である。立山を選んだ譯はその山は他の山の樣に、行者だとか坊主だとかでなく、一人の小さな小供が鷹だか鷲だかを追つて行つて、知らぬ間に登つたのが開山だと云ふ傳說が、何だか我意を得たからである。

まさか田舍の小路を歩く樣には行かず名にし負ふ立山の事だから、一寸心細さが先に立つて、此男は他に二三人の連れを誘つた。

●●

その結果は、多少、ジョン・ラスキンの言ふ事には誇張があるにしても兎に角、山登りは面白いと云ふ事が判つたのは事實である。然し、それ以上、その快樂を得るには、實に大きな肉體的努力を要する事を體驗した。そして、その肉體的努力と快樂を天秤にかけた結果は、どつちか一寸判斷しかねたが、山登りの印象は中々深かつた。

その中で彼を喜ばしたのは、芦峅寺の所謂『チウゴ』である。强力とか案内とか云へば万人向きの處、チウゴと云ふのがその男の御意に召したのである。何と書くと聞いたら『仲語』と書くと敎えられたのでその男は正直に仲語と云ふ漢字を使つて居る。

●●

その男の庸つた仲語は相等の年輩で身の丈あまり高からず、當然の狀件として筋骨あくまで頑健、名はその笠に書いてあるので『甚三』であると知れた。ヂンザと發音す可くその『甚三』から命ぜられたのでその男は正直に服從した。

然し顏は殘念ながら、文字通りの山男面である。眼の光は芦峅寺から雄山の頂上迄射通す樣な感じがした何だか、オツカナイ眼付きである。氣の弱い伴れの一人は、『確に三四度は牢にぶち込まれた奴だ』なんて云ふ。

皆は『ヂンザサン』と敬稱を用ひた。斷つておくが、誰でも得態の知れない人間には敬語を用ふるが一番無難である。ヂンザサンの山登りは悠々として居た。十丁歩く内に一丁

は必ずその氣紛れな男よりおくれるその歩調は確に immer langsam とか云ふ山登りの原則に適合して居たらしい。そしてヂンザサンは一寸の休みの間にも背中から大きな辨當箱を取り出して飯を食つて居る。辨當箱の大きさは悠に一升飯が入る位だつた。從つてヂンザサンは自ら云ひ出して『一本立てる』樣な事はなかつた。然し何だかそのヂンザサンの第一印象が氣持ち悪いので誰も敬遠して居た。

●●

藤橋をすぎて材木坂を登り出すと例の肉体的努力と空想期待との天秤ゴツゴが初まつた。氣紛れな男は谷の向ふ側に早乙女が見えたり稱名瀧が見えたりする度に雀の樣に羽ばたきをして喜んだ。兩側、名も知れない草や木の處はもう飽きて居たのでやけになつて急いで行く。然しすぐその氣味悪いヂンザサンがおくれるので見晴しの良い場所へ來ると待ち合せたところを見ると氣味悪いヂンザサンの側を離れる事は猶一層氣味が悪かつたに違いない。

ヂンザサンは時々面白い話を重い口から切り出す。

『此の深い處をあなたの國では何と云ひまかね』

『谷と云ふさ。』

『谷でせう。』――ヂンザサンは我意を得たと云ふ樣な口調である。

『ところが信州の奴はこれを澤て云ひますよ、奴等は變な言葉を使ひます』

こんな會話が思ひ出した樣に初まつて行く、會話の度にお互に親しみが出て來た。

●●

彌陀原から奥の方は至るところその男を嬉しがらせた。そして例のヂンザサンとは相等仲好しになれた。ところが道々行きちがう仲語や人夫のヂンザサンに對する態度が一寸上長に對するそれの樣に見えた。それでその男は、ヂンザサンは仲語間では相等上役にちがいないと思ふに至つてそろそろ敬意を拂ひ出した。

山を下る道すがらの事であつた。手に手にアルペンストックとか云ふ立派な道具を持つた四五人の一行とすれちがつた。その一行の仲語がヂンザサンを見るなり呼びとめていかめしい旅裝の一行に紹介してるらしい。ヂンザサンは一行に取り卷かれて何か話して居る。地圖の上での說明らしい。その男は仕方ないから少し離れて用事のすむのをまつた。いかめしい御一行は鄭寧にヂンザサンに禮を云つて別れて行く後姿を見送りながらその男は何の用事だつたのか聞いた。

『別山から劍へ出て黑部を渡つてから針木へ歩くのだ相でさ』

その男は今更ヂンザサンはエライ

仲語サンだと思つた。いかめしい一行の仲語すらそのヂンザサンにサグツションを與へられて居る。これは俺なんかの庸ふには少し上等過ぎる仲語さんだと思つた。

●●

そこでその男はその偉い仲語のヂンザサンを紀念する爲に立つて貰つて寫眞に撮つた。

今日一日の給料に酒代までもらつたんだからと云つて、芦峅寺で斷つたのに五百石迄荷物をもつてついて來て呉れたのでその男は山の人の素僕をつくづく思はされた。

汽車が出る迄ヂンザサンは見送つて呉れた、そして又來年來て下さいと云つて居た。

ヂンザサンの寫眞は、構圖や何かは相當面白いものだつたが、勘心の露出が不足だつたので燒き付けもせずにしまつてしまつた。

●●

二年の後、再度その男は芦峅寺を訪れた。その時には、確に、山登りの快樂とその肉体的努力と天秤にかけても、損がない事を自覺して居たそして前よりはいくらか山の樣子も聞き知つて居た。

芦峅寺の山案内の連中では、長次郎だとか平藏だとか云ふのが、日本で名たるヒユーラーである事を聞きかぢつて居た。

そこでその男は先づ宿についてから、平藏をよびにやつた。少時するとその平藏が出て來た。

その男は平藏を見るなり驚いた。そはれ二年前、自分の庸つた例の『ヂンザサン』では無いか。

『君はヂンザサンて云ふんでは無いかね』

『エー、家代々私のところはヂンザですが、私の名前は平藏と云ふんですよ。貴君は二年前お山へ來られた事がありますね。

●●

その男は自分の親類で田舍に居る人の名前は石サンだのに、その村では石さんよりも先祖名前の『源太ハン』の方が通用して居る以上、『ヂンザサン』が『平藏』であつたつて少しも不合理でないと考へた。

その氣紛れな男は家に歸るなり、二年前のヂンザサンのフィルムを出して、それを念入りに增像して燒きつけた。そして又鄭寧にアルバムに張り、特有の悪筆で、『芦峅寺の平藏』と註を書き入れたのだつた。

●●

ヂンザサンが平藏だつた事は、その男の旅の思出の中に今なほ、譯もなく面白く活躍して居る。

技術の進歩と体力

岡村源太郎

スキーが一般的になつてからといふものは、我々スキーランナーは、先輩或はスキー術書に依つて色々の技術上の教示を受けた。そしてその技術の進歩は年と共に著しくなつた。例へば或スキー地ではその過半數の單杖が復杖に突然變化した。又アルバイン式スキーは次第に凋落の域へと沈んで行く。練習場に於ても直滑降のスプールはたとへ亂れて居ても必度一本の線を形成して居る。そして今までストップ以外には餘り用ひられなかつたスウイングは、スラロームまで進んでその應用範圍は實に廣くなつて、單に練習場のみならず相當險難なる山地にまで入り込んで來た。數年前まではジャムプターン等は誰も殆ど顧るものなく、全然實用性の無いものとせられて居たのが、現在ではステムボーゲンを唯一のテクニックと考へて居つた所にも、極めて輕妙に使用せられ居る程である。

又ジャムピングも從來は極めて僅かの研究者に依つてのみ、ジャムプらしいものが行はれて居たのであるが、之も堅實に急速なる進歩を遂げつゝあつて、今は練習場として練習用のシャンツエ位を見ぬ所は殆ど無くなつた。そして谷深く又は峰に反響して來るランディングの底力ある音は益々頻繁となつて來た。更に之は實用的方面にも

トレーケホッブ等の盛んになるにつれて、次第にその應用範圍をも擴めて行くのである。

然し之等數多くの技術が完成の域に次第に進む時、体力がそのスキーランナーの技術に大いなる影響を與へるものである。習得せらるべき技術の運用に對して完全なる運動神經の作用が現はるゝ可能性があるとも、その支配を受くる筋肉の力が不充分であるならば、決してランナーとしての滿足を得る事は出來ないのである。我々が日常眼につく事柄の内にも、この種の技術と体力との不調和とも云ふべきものによく接する機會を有して居る。

例へば或スキー旅行を行つて、數時間の勞働の後に或急斜面で直滑降を一本やる等といふ時に、そのスロープを平常ならば立派なスタイルで安全な直滑降を爲し得る自分の相手のランナーが、そのスロープ中の一寸抵抗の多い所で脆くも轉倒をする事等に遭遇する。その時の轉倒の樣子を注視するに、彼はスロープに對し恐怖心を抱く事も決してなく又滑降開始の狀態も非常に順調なのである。然るにその日の疲勞の爲か、僅かのショックに彼の膝は調節力を失つて、遂に石塊の山の崩れるが如く倒れてしまふ。又上腿の筋肉の少からざる努力を要するテレーマークスラロームを續ける時、場合に依つては中途に於て、そのテレマーク膝保持の勞力に耐えかねて、遂に最初の目的を達し得ない事もある。逆脚の斜滑降を爲さゞるを得ない場所等では、後退脚の斜滑降としてのノルマルなる姿勢を完全に保たうとするには、自分等の逆脚が体重保持に對して餘りに弱いのに氣が付く。

かゝる例はスキー術の極く一小部分に現はれたものに過ぎない。スキースポートの全ては皆、技術に伴ふ体力を大いに要求し、スキー登山家として、スキージャムパー或はクロッスカントリーランナーとして、勝れたる結果を見るには必ずこの兩者が平行に進まねばならぬ。ジャムピングをやるにしても、長大なる飛躍に成功する時は、ジャムパーの見事なフライト、ランディングのみではいけない。そこに距離が長ければ長いだけの大きなショックに對して大いに頑張らなければならぬ。スキーレーシングに參加する時は、長時間に亘つての雪とスキーとに對する勞働に對して、ランナーは己が身を支配し得る技術を有するのみではいけない。强健なる筋肉と内臓の力に俟つ事極めて大なるものがある。或はスキー登山を爲すに當つても、登高に對する身体の大なる仕事、凜烈たる寒氣、稀薄なる空氣中に於ける抵抗力は勿論必要であるが、又一グループは成るべく平均せる技術体力の持主でなければならぬ。優秀なる技術は、良好なる雪質、天候の下では、日に驚くべき長途の旅行にも、そのスキー家の体力の欠陷を補つてまでも滿足

すべき結果を與へてくれる。然しながら一朝惡雪呪ふべき天候に遭遇したならば、技術体力に對し不平均なる者は、極めて悲慘なる狀態に立たざるを得なくなるのである。

かくの如く体力は確かにスキー術に取つてその重大なる一部分を爲して居る。而もこの体力なる問題が、スキーに限らず各種のスポートが世の教育者流の眼に、奬勵すべき價値ありと認められ居る原因である。然しながら前述の意味は、決して技術の研究を怠るとも可なりとの點に立脚したのではない。動もすれば体力の不經濟なる使用に墜り易きスキー術發達の初期には、專心技術の習熟が必要であると共に、相當の熟練者も今後益々技術上の研究に力を致すべきである。そしてその技術のより完全なる運用に對して体力が可成り重きを爲す練習に身を委ねるやうにしなければならない。体力は技術を助け技術は体力を助けて、スキー術のよりよき發達を期すべき筈である。

之等の体力の修錬は特にスキー登山、スキーのディスタンスレースに於て、より一段の重要さが認められるのであるが、ジャムピングに於ても前述の如く、相當注意すべき點が少くない。冬季に於けるスポートたる以上は、雪、寒氣に堪える抵抗力を養はねばならぬのは勿論の事である。又登行及びジャムピングを繰返す上にも、心臓等を强健ならしむる必要も認められなければならぬ。之等は特別の鍛錬法を講じなくても、通常スキー練習場に遊ぶ時にも容易に實施せられ得る事であり・既にジャムピング練習に取掛つて居る程のランナーならば、充分に之等の抵抗力は有して居る筈である。それでスキー家は先づ身体の欠陥を常に襲はんとしつゝある外力に對して、その抵抗力の欠損を爲す如き事無きやうにせねばならぬ。

かゝる注意はジャムパーのみならず、全てのスキー家並に初心者にも必要なる事であつて、その爲には身体の狀態の變化、服裝等に充分注意を要する。例へば暖室より出でゝ急に寒冷なる外氣に曝さるゝ事、極めて嚴しい寒氣の時に咽喉部の保護を忘るゝ事、汗ばんだ身体を永く動かずに寒風の吹き付けるまゝに爲しをく事等は何人も避くべき事である。詳細なる注意に就いては既に各種のスキー術書に示されてある筈であるが、技術の熟達と共にこの衞生的注意而も殆ど分り切つたやうな事を忘れてしまふやうではいけない。この爲に服裝が顧慮すべき問題となるのであるが、要するに必要にして充分なる程度に着るが最もよいと思ふこの意味で、普通のスキー家は衣類の着換、着脱等に時間を餘り惜まぬ方がよいと思ふ。又練習場に於ても凍傷に注意する事は必要で、之も服裝の欠陥から來る事がある。之

は一度やるとやはりその部が凍傷に對して抵抗力が弱くなるのであるから、一般に登山、競走を爲す人も平常の注意を忘れてはならない。

雪眼の豫防に就いても。注意せねばならぬのであつて、日光の强い春に於て、又曇天でも霧のかゝつて居る時等は必ず燻色眼鏡の使用を忘れてはならぬ。練習から歸つて眼が充血したり、痛みを覺えたならば、僅かの犧牲を拂つても治療を充分にしなければ、あとで直ぐ後悔する事になる眼が悪い爲に、他は全て健康な身体を休ませる程、馬鹿らしい事はない。

更にジャムピングの筋肉的運動即ち、フライト中の急速なる動作、ランディングの時の大なるショックに對する頑張り等を考へて見るに、之も中々エネルギーの要る仕事である。身体の完全なる平衡を保つ爲にも、可成の微妙な運動も必要であるが、上記の大きな運動に對しても直接にジャムプをやらぬ時にも、その動作の練習は必要であらう。此の目的に對して簡單な豫備運動として、屋内的に試みられるクローチングダウン、サック、フライト、ランディング等の補助的体操が推奨せられて居る。体操は如何なる場所にも實行し得て、思ひ出したやうに時々やつて見るのがよい。ジャムプのみならず他のスウイング等をやるに就いても、平常その型を眞似て、スウイングの際に使用する筋肉を慣らしておくのは、確かに有益な事である。その他雪なき季節に盛んに行ひ得る、ランニング、登山、鐵棒体操蹴球等が立派な補助運動となつてくれるであらう。

この夏もやるといふ一年を通じての体力の養成は、確かに効果のある事であつて、冬季のみで運動を中絶しては、決して充分なる結果は見られない。

兎に角ジャムパーは極めて短時間の間に、全身の力を籠めて、最も眞劍味のある動作を完了せんと努めなければならぬのであつて、その運動の原動力たる体力は直接の練習の時以外に於ても養つておかねばならぬ。之に依つて始めて優秀な技術は遺憾なく發揮せらるゝ事となるのである。

ディスタンスレースはスキー競技としては最も体力を必要とするものであつて、技術の習熟は、体力の完成に依つて始めて活用せらるゝのである。即ち練習は技術の修錬も含まれるが、体力の鍛錬に於ては他のものとは比較にならぬ程の重要さがある。そして体力は筋肉のみが發達して居るだけではいけない、過激な筋肉の運動に伴ふて、全身の種々なる器管が活動するのであるから、之をも鍛錬する必要がある。殊に重要なのは、心臟及び肺臟であつて、之は又練習に依つて、或程度までは可成增加せる仕事をも爲し得るに至るものである。

筋肉は單に下肢のみならず、胴及び上肢の筋肉も極めて重要なる役を務むるのである。之等の筋肉の發達は練習の時に充分行はれる、そしてよく過激の勞働になれて、決してアプノルムの疲勞を感ずる如き事なきやうに充分訓練すべきである。よく訓練せられた筋肉は、競走後に最も速やかに疲勞が恢復するものである。又競走中にも落伍する樣なこともない。さりとて過度の練習は避くべきで、過勞は反つて惡結果を生ずる事を知らねばならぬ。

長時間に亘る寒冷なる空氣の激しき呼吸等は、呼吸器の保護を重要視せしめらるゝ理由であつて、呼吸は鼻孔より爲すべき事、首の部分の保護等は勿論必要である。先に述べた條項も亦此處に充分適用し得るのであり、又より一層重要と見られる。先づかゝる消極的の事柄より注意して積極的の内臓の鍛錬に取掛らねばならぬ。

前述の如く筋肉と共に最も重要なるは心臓及び肺臓であるが、之は餘程注意して行はねば、反つて健康を害する事になる。即ち内臓が增加せられたる仕事に對し、餘裕を以て適應して行き得るやうにしてやらねばならぬ。それで最初は徐々に初めるやうにするがよい。又何かの理由で練習中止を爲て居た時にも、再開する時には勿論漸を追ふて爲すべきである。

又この目的に對して、冬季のみの鍛錬で中止することは甚だ面白くない。一年を通じて練習せねばその効果は不充分である。平常肺臓のみの訓錬には、深呼吸、輕い亞鈴体操等がよいが、全身的の運動を爲せば、筋肉及び心臓、肺臓の三者は共に勞せらるゝ事となり一層合目的である。即ち補助運動としては、ランニング、登山、水泳、漕艇、蹴球等が最も適當であらう。又補助運動はその人の体質に依つても相違すべき筈であらうが、要するに何か自分が夏季得意のスポートがあればそれを專心やればよいわけである若しそれが全身的の運動であるならば。

又登山としては、冬季のスキー登山は最良の補助運動である。同じくスキーにてのクロスカントリーである以上、競走の技術と登山の技術とは隨分一致した所もあり、又春季のレーシングに不向の時節には、スキー登山に依つて一層長期間スキーに親しむ事が出來る。

登山は殆ど一年中のスポートと云ふ事が出來て、スキー登山者は一年を通じての活動に對して極めて便益が多い。而もスキーを用ひての登山は十二月下旬より五月下旬まで殆ど半年の長きに亘つて居る。登山に對する体力の養成は比較的容易に行はれ得る事と思はれる。

然し登山以外の時には、常に安息に日を過して可なるかと云ふに、決してそうでない。大旅行等を計畫せんとする

時に、その時の準備品等にのみ注意を集中して、動もすれば身体の鍛錬を忘れて一ケ月間も少しの登高を爲さずに居る事等は感心した事ではあるまい。山殊にスキーを乘り入るべき雪の山は、登山家として亨くる最大の悦びを與へてくれるであらうが、時としては重い背のリュックと共に極めて執拗にスキー家を惱ますものである。雪の狀態は到底一言する事は出來ない、一夜の降雪に依つて生ずる表層硬雪は甚しく一グループの行進を抑制し、或は一夜の降雨、一日の太陽の直射は、雪質の變化に對して驚くべき力を有して居る。之等に依る登山中の困難は超技術的の場合が極めて多く、最後の頑張りは結局その人の体力に歸する事も屢々起り得るのである。若しかゝる狀態に遭遇した時、過然その時コンディションが惡かつたスキー家は、不幸にも極めて不利の地位に立たざるを得なくなる、且つ一グループの不幸の誘因を作る事になる。よくスキー登山隊が困難な旅行を爲した後に、「あの時皆がほんとうに元氣よく一致して努力してくれて、今考へて見ても大變うれしい」等の言を聞く事があるが、その困難なる場合にあつても、グループの体力が皆良コンディションにあつたといふ事に、その登山の成功の原因の大部分を歸する事が出來る。このコンディションを良好に保つ爲には、やはり平常の生活より基礎を作るやうにし、筋肉、心臓、肺臓等は勿論の事、消化器の健全を期し、營養は充分良好ならしめておかなければならぬ。低運山いと容易な登山にも飽く事なく、己が体力養成の意味にても、努めて小登山をも數多く行ひ、不攝生なる生活には常に遠ざかるやうに注意すべきである。動もすれは暴飲暴食を以て山男のモットーなる如く考へ、全て不規則に過す如きは、眞のスキー家の決して取らざる所である。又輕い登山以外にも補助運動として適當なるものは極めて多いのであるから、自分の好みに應じてそれ〴〵他のスポートを覗く事もよいと思ふ。又スキーレーシングの練習は、技術及び体力養成の上に短時間にて効果を見るには最適の手段である。

又スキー登山家は体力以外にも種々の山岳の狀態に同化しなければならぬ。山岳美が勝れて居れば居るだけ、山岳は特種の狀態を保持して居るものである。吹雪は平地のそれより一層濃厚に激烈に襲ひ、荒れ狂ふ暴風に遺憾なく水銀柱は低下して行く。エゾの下枝の上、厚き雪の上のテントの中に、淋しき蠟燭を相手の幾夜かを過さねばならぬ。時として頼りにして居るシュラーフザックも、効果なきかとまでに思はるゝ事もあらう。生死の境に立つべき難場にあつては、寒氣による僅かの苦痛は快い刺戟と感じなければならぬかも知れない。雪中露營等の時は要するに、寒氣

に慣れた容易に熟睡し得る体質の人が、結局体力優秀者に勝る事にもなる。

即ち小登山又は補助運動に依つて、筋肉並びに内臓の能力を増進すべきと共に、山岳てふ別種の世界に入るべき準備を忘れてはならぬ。山岳旅行中の食慾減退、体力消耗に對する補給物は、平常の營養を良好ならしめて、之に備ふべく、登山出發前一週間前は一層注意すべきである。さりとて餘りに消極的手段も考へもので、寒冷の雪中に活動するとも何等の支障なきやうに、身体の抵抗力をも強めなければならぬ。外見は健康と見えても、雪の山岳に入つて意外にも身体の變調を來す事がある。簡單な例ではあるが、温浴等も必要以上に頻繁に入るのはよくないと思ふ。温泉等にあつても、登山出發前ならば、其處でまづ山岳に對して身體を適應せしむる積りで宿泊上の注意を考ふべく、又スキー家に餘りある設備を與へてくれるヒュッテ等に於ても餘り豪遊的氣分にはなれまい。大なる計畫を立てた時等には、出發前又は登山口に於て、所謂足慣らしのやうなものが、山に入る準備として行ふべき價値がある。

かくしてその一グループが殆ど一致した體力と、山岳への融合性を有して居たならば、又は其他の狀態をも申分なきものに統一しやうとしたならば、之に依つて、登山中の不幸事件少くとも其の内部的原因より起るものは、大部分救ふ事が出來ると思ふ。

要するにスキー登山は、普通の夏季登山とスキー術とのコムビネーションとも考へられ、其の衞生的注意等は二重に爲さねばならぬ事にもなる。即ち冬季登山の困難は此處にも原因を發して居るのである。之等に對する身體的注意をも全て體力の問題とするのは、少しく無理であるかも知れないが、我々は登山に於ては技術は或程度まで達したならば、あとは身體の力であると云ふ事を忘れる事は出來ない。其の身體を我々が作り上げる爲には、僅かの努力にも大なる價値を認めな事が出來る。

兎に角技術を揮ふに就いても、己が深き研究の効果を見るにも、皆體力が根本となつてくれる。其の體力養成は練習の際或は登山中に、何人も行つて居る事であるが、更に此事は平常よりも考へて居らねばならぬのである。山に入つて始めて登山者と成り、シーズンに入つて始めてスキーランナーと成るばかりではいけない。年中精神的にでもスキーに親しむ人としてありたいものである。練習の際の考へ無しの態度が排すべき事であると共に、徒らに夏の眠を貪るのも感心した事ではない。

以上述べた所は大低スキーランナーとしての體力の必要であるから、各異つた方向に進まれる人にも、スキー家と

しての共通した注意點を多數見出し得るであらう。私は此處に、その體力の重要さは技術の進歩と共に高まるものである事と、其簡單なる體力養成法とも云ふべきものを總括的に述べようと爲たに過ぎない。細い具體的方法に就いては幾多の經驗深い人の教導を待つ事とし、又我々も今後益々深く考へて行きたいと思ふ。（二四・七・一六）

夏街所感

×

美津濃か何かの看板みたいな勇ましい、いでたちの登山家が、長いピッケルを持てあまし乍ら歩るいてゐる。リュックは血を吸つたダニの樣。その上に飯盒やシュタイグアイゼンが、ちやんとついてゐる。それにザイルと瀬戸引きのコップも。アイガーやメンヒがすぐ眼の前につゝ立つてゐるグリンデルヴアルトでゞもあればいざ知らず、關東平野の眞中の、東京の町の中だから笑せる。何とかもうちつと、あつさりと願へないものかなと思ふ。

×

信濃鐵道に乘る。見廻した所、皆登山家ばかり、御互に相手のリュックを見たりしながら何處で降

HENEL 21

りゐか知らん等とぢろぢろ眺める。元來あんまり大きくない汽車だから、天狗の鼻と鼻とがすぐぶつかつて仕樣がない。なんて事を考へ乍ら色々山の雜沓を想像して見る。

×

岩魚止めのあたりで、「大正十三年七月×日××登山。××大學山岳部」なぞ書いた木札を五六枚しよつたリーダーが、新しいルユックザツクに「おい、人の見てゐる所だけは、少し元氣を出して呉れ」なんて叱つてゐる光景なんかを考へたり、ナーゲルシューをはいてる人間が、ちやんと背中に、わらぢを用意してゐたりする有樣なんかを考へると、仲々、トタンや人いきれの暑さを忘れる位に興味津々たるものがある。

×

今年の上高地は、夜なんかは、森の中にあかりが、ちらほらついてゐたり、人がぞろぞろ歩るいてゐたりして、仲々賑かだ相である。今にソーダ、ファウンテンなんかの店が出來るかも知れない。

〔ま・か〕

山地に於ける方向決定の方法

板本丁次譯

冬の山地に於ける方角を決定することは困難なことである。道や橋には雪が積つてゐる、夏の山の地形は冬になると全く違つて終つて夏ならば夜でも霧の中でも路を見付けられる樣によく知つた人でも、そのよく知つた土地がまるで見知らぬ土地の樣に見える。

道標や岩や柵や小さい籔や灌木林や、時には牧場の小屋さへ雪に埋められる。水槽や穴はうずまり、普段は危險のない草の崖は雪壁や吹雪が舞つてゐる。霧の時には總ての土地の差異はなくなる。人々は殊に速い進行の時にはコースが下つてゐるか上つてゐるか判斷し得ない。で人々はもしこの迷ひ易い條件を考へに入れるとどうしても徐々たる進行を餘儀なくされる。

また、近づいて見れば、非常に小さくなつて終ふものではとてつもなく大きく見える、視覺錯誤や、暗澹たる單調の、音響を消す作用等は冷靜と強い意志を要する、少くも相應する丈の用意をする條件となる。

旅行者は、地圖を讀むことを知つて居ればその地方の地圖に身を委ねることが出來る。この場合にすら、錯誤を蒙ることがある。

先づ何よりも磁石の信頼し得るものが必要である。

人々がよく時計の鎖に付けてゐる樣なものは價値がない照準孔のある照準裝置の開け外すことの出來る樣な磁石(Bezard bussole)を求めるのに價の高いのを恐れてはならない。

方向を正確に決めるには、磁石を手に持つて見ては充分ではない。人に付いているか或は所持している金屬体は指針を外らす場合もあるから。もし、方向を出來るだけ誤のない樣に決定するには、磁石を一寸離れた固定物の上に戴

せて約一米突離れたところから指針を觀察するのである。太陽の照つてゐる天候では必要によつては懐中時計でも、正しく動いて、旅行の前から調整されてあるものであらば磁石の補助となすことが出來る。それには時計を水平に置いて時針が眞直に太陽を指す樣にする。その場合に、時針と、十二時の上の半經との二等分線が南北線を示し、又、二等分線は南を指して居ることは明かである。その延長は即ち北を示す。霧の日には、例へ。特別に明るい空の處が太陽の位置であることゝ推定されても、この方法では少くも精密を缺いてゐる。こゝに於いて磁石が有力になる。この場合には出來るだけ繼續して觀察をしてコースの曲つたことゝ方角の調整をしてゆかなければならない。そうでなければ知らぬ内に側方へ外れてコース外に出る恐れがあるこの横へ偏つたのを見るには第三番目に行く人が先頭と二番目の人を視透すことによつて最もよく、聲をかけて直すことが出來る。この事はアムンゼンの南極の報告に於ける當該の項を比較せらる。多くの山地にあつては屢々、霧が濃く且つ繼續してかゝり、北極の狀況を想ひ出す樣な高原もある。

道標。もしこんなものがかゝる地方にあつたとしても畢竟幻覺か何かであらう。何故ならば、雪や霜や凍氷が板を蔽ふて居るからである。若くは、道標は雪を冠つた枝の下にかくれてゐて速く滑つて行くスキーロイファーの眼には見えないであらう。

スキー目標。これは甚だよい設備ではあるが、未だ尙、確實なる信賴は出來ない。

旗は綱で路の上へ斜めに縛られてゐるが大抵第一の冬の暴風に持つてゆかれて終ふことが多く、桿標も絕對的確實であるとする譯にはゆかない。獵の時や霜が降りた時には桿を見すごす。高山に於ては餘り遠くへ出たことのないスキーロイファーは居住地から一時間位來た時にもう、見別けることが出來なくなり、夫れ以上の場合には吾々の仲間でさへ桿から桿を捜してゆかねばならない。それは桿が甚だ密に立てられて居ても一つの標から次の標へは眼がとゞかないからである。（スキー標の精密なる統一の制式は、ドイツスキー聯盟で定められた。）

夏季には場處の目標（めじるし）となるものに信賴出來るが冬季には必ず目標があると決める譯にはゆかない。しかし磁石の狂つた場合には自然物の目標によつて失はれた方向を再び發見する方法が試みらる。夫れには色々ある。山の登りには大なる岩塊や谷の切れ目や、孤立樹や森の中の切り明や小川の凹み等の特徴を考へに入れるのが常である。人々は周圍を取り卷く個々の山々の姿容を注意して地圖によりその名を記憶する。思ひがけなく霧や雲に包まれた時には尙、

瞬間的に、形狀を知つて山々の一つが雲の切れ目に現はれて途行の方向を定めたり變換をなす機會を與へることもあり得る。

冬の初め、冬の終りには雪の性質には少し變化がある。この時節には、南及び西の斜面は溶けて凍つて、柔い溶けかゝつた雪（Tauschnee）又は獨特の變つた雪で蔽はれる、然るに北や東の斜面はまだ粉雪が積つてゐる。天候は初めから不確實で霧の降りることも考へに入れて置く必要があるから時々、星印を雪に付けたり階段狀の足型を目標に付けたりして置く。雪が降ればこんなことは全く無效であるが。

總て之等の目標に注意しないで若くは初めから下りを知らぬ道に計畫した時、失はれた方向を再び知る道がある。夫には先づ霜柱が役に立つ。既に知られてゐる如く、樹木や棒や岩又は風の強く觸れる物の側に風の方向に反對して即ち風上に向つて立つ。でもし天候の狀態、又はその時分優勢なる風についての智識を持つて居ればひどい霧の中でも方向を知ることを得るのである。もしかゝることを敎へられて居らぬ人でも霧は多くの場合濕分で飽和せられた空氣の加溫によつて發生することは知つて居るであらう。この加溫（溫度の上昇）はたゞ南又は西風の時に起り得るものであるから、此點からも方角に關する大略の根據となすことが出來るのである。（多くの場合之でも充分である）もし霧が之とはちがつて雲によつて起つたもの、即ち現に雲に包まれてゐて溫度の上昇があつたとしたら（溫度の上昇はスキー旅行家の携帶缺く可からざる Schwingthermometer に現はれるによつて確實に知り得る）優勢なる風の際には再びその方向によつて決定することを得る。

雪庇（Wächte）は方角を定めることを容易ならしめるものである。雪庇は風によつて常に風下に、即ち風の方向と一致して生ずる。

Wettertannen（風信樅と譯す可きか）も同樣に方向を決める據り處とすることが出來る。

Wettertannen の枝は吾々の地方に於ける優勢なる西風なるによつて風の方向に成長して居る。樹木の幹についた苔や地衣にも之と似たことが宛てはまる。之等の附着物は多く幹の西側を蔽ふて居る。

スキーの條痕に出遇つた人は幸運と云つても可い。既にこの處を或る人間が通つたと考へることすら元氣を旺んにし、新しい確信を生ぜしめる。この出遇つたスキー痕がどの方向へ走つたか又はこのスプールは新しいか、古いかを識別するのは難しい事ではない。唯熟考すべき事である。彼れが山を登つて行つたか或は谷へ下つたかは、要するにその人はどちらからか來てどちらかへ行つて終つてゐるのだ

から、結局は吾人にとつては同じことである。しかし冗な時間を費すのを避けるために詳細に調べるのであらう。彼の前記の人が杖を持たずに行く樣なことは滅多にないことであるから杖のスブールを見付けたら色々なことが判るであらう。登りの杖の跡は深く押し付けられて居る。腕の重みが支持の杖に働いて居るから。之にスブールは稍々間隔を置いて離れて、大抵右左に交々になる。下降の杖の跡はとびとびに印ぜられ、中絶の間が遠いか兩側に平行線に付いて居る。其時はロィファーは突進してる時で杖は後ろへ引きずつて居る。一本杖の跡は上行と下降と共に甚だ特徴があるからすぐ判るであらう。同じ樣なことをスキーのスブールも知らせる。傾斜面に滑らかにつけられた時は谷間の方向への下降を意味する。段々となつた切れ目のあるシュブールは登行を示す。ステムボーゲン、テレマークやクリスチャニアの跡は下降を、スキーの先を開いた歩みやキックターンの跡は上行を示す。轉倒の跡も下降に對する最もよい特徴である。

最後に Bilgeri の實驗したコース圖、これは霧の中高い土地で樹木や灌木のない地方に於いて即ち殊に高山などで目標の見當らぬ時に應用せらるゝ Kursskizze について述べよう。完全になすには定評のあるアルペン聯盟もしくは參謀本部の地圖と、角度計と磁石を要する。そして小屋の内にて、またはすでに途上についたら遲くも霧の來らぬ前に、手で地圖に印をつけ、全行程を一枚の紙の上に（手帖なら一層よいが）描き取り、突凸した點殊に目標によい點や小屋岩石、頂上等を直線で相互に連絡し、二點間相互のなす角度を最精密に測るのである。そして是等の諸點に、上りと下りの數字を米突にて記し、角度は度にて、個々の點の距離は同じく米突にて入れる（地圖の單位標準から知つて）行途に於いては磁石によつて絶えず調整される方向から外れてはならない。殊に、前に行く人々とは常に連絡をとつて眞直から一寸でも外れたら直ちに訂正しなければならぬ。この理由から案内者は縱列の先頭に居ないことを要する。特に電光形線に上る時や蛇行して下る時には方向の維持は甚だ難しい。こゝに於いて決して不注意の夢中で眞直の行進をしてはならない。むしろ、方向を變へる毎に止まつてシュブールの方向が正當か否かを調べて見る可きである。引返し點間の各直線は全行程の方向の直線に對してその方向に正しく進まねばならぬ、即ち左の方へ向いた登り或は下りの直線は全行程の線と共に常に同角度をなし同樣に右方へ向いた上り或は下りの直線もさうなる樣にする。

かゝる方法に據つてのみコース圖の上に記された各個の目標點に到達するか之に近い處に達せらるゝ保證を有する

確固たる指導の下に實習して之を覺えるのが最も善い。

ある個人の本能は失はれた方向を見出すのに時折助けとなるも統制なく之に身を委ねることは無謀である。

知らぬ土地に於いて方角を定めるには常に綜合力ある頭腦と鋭敏なる觀察力とを要する。この能力に委すことの出來ない人はその旅行を晴天の日に限るか或は經驗深い隨行者と共にする時に限つた方がよい。

行つて見たことも人から聞いたこともない樣な、一歩すら前進することは危惧される樣な位置に陷つたら露營しなければならない。

何よりも第一は各自は、自分の獨力で彼の實驗と体力と造り得ると信ずる人でも、理性や注意や克己は冬の旅行に於いては信賴すべき貴重なる隨伴者であり助手であることそして表面上の慢心の征服は自個及同伴者の生命を睹してあらゆる手段を講じて初期の目的に强行して到達することよりもより大切である。(Carl. F. Luther, Skibuniot より)

國際スキー聯盟規約

一九二四年二月二日シャモニーに於て可決

第一章　目　的

第一條　國際スキー聯盟はスキーに關する國際的問題を解決せんが爲に設立せられたるものにして、各國スキー協會の自由は相互に之を尊敬し、その國内問題に干渉せず。國際スキー聯盟は各國スキー協會の勢力を强固にすべく相互間に於ける永久、善良なる關係の保持に努め且つ國際競技に行はるべき規則の提案及び是認

各國スキー協會は國際スキー協會を作り、之を Federation Internationale de Ski〔F. I. S.〕と稱す。

をなす。

第二條　國際スキー競技に對する規則及び規定は、國際スキー聯盟加入國に於ては、競技者の國籍如何を問はず適用せらるべきものなり。

國際スキー聯盟に於て決定せるアマチュア規則も亦全ての競技者に適用せらるべきものなり。

第三條　國際スキー聯盟は加入國間に於ける爭議解決の權を有し、之を次期會議に附議す。

第二章　加　入

第四條　領土的並に政治的單位をなす一國は一協會により代表せらるべきものなり。

第五條　國際スキー聯盟加入國たらんとするものは加入申込書に規約及び競技規定を添付すべし。

第六條　加入の諾否は委員會によりて定めらる。委員會多數を以て加入を許諾せる場合に於ては一時的加入國とす。最後の決定は次期會議に於て行ふ。

第七條　國際スキー聯盟より脱退せんとするときは、その旨聯盟幹事の手元に到着後一ヶ月を以て成立す。脱退年度に於ける負擔額は全額拂込をなすべし。

第三章　組　織

第八條　國際スキー聯盟は左記機關により統轄せらる。

國際スキー會議

會議に於て選擧せる委員會

第四章　國際スキー會議

第九條　通常會議は前會議に於て決定せる時期、場所に於て開催す。毎二年開催するを以て原則とす。

第十條　各加入國は會議に於て一個の議決權を有す。但し三名の代表者を派遣する事を得。代表者は各國自國民たることを要す。

第十一條　會議は國際スキー聯盟總裁之を司會す。會議の公報は聯盟幹事之を編纂す。

第十二條　會議の日程は、決算報告、豫算、前期間に於ける委員會報告並びに全ての議題を明記すべし。

議題は會議前六週間内に委員會に通告すべし。委員會は各加入國に對し如何なる場合に於ても一ヶ月前、會議の日程を記入せる文書を以て通告をなすべし。

第十三條　會議に於ける議決は多數決による。贊否同數の場合に於ては總裁の贊否により決す。但し本規約の改正並びに聯盟解散の場合に於ては出席國四分の三以上の多數決たるを要す。

第十四條　會議は要求あるに於ては委員の選擧は無記名によるべし。

第十五條　日程外の問題と雖も出席國四分の三以上の同意あるに於ては會議の討議に附することを得。

第十六條　加入國半數以上の要求あるに於ては委員會は要求到着後三ヶ月以内に臨時會議を招集すべし。右要求の申出には日程を添付するを要す。臨時會議開催地並に開催時期は委員會に於て之を決定す。

第五章　委員會

第十七條　會議間に對し選ばれたる委員會は總裁、副總裁幹事、會計及び六名の委員より成る。

フィンランド、ノルウエー及びスウエーデンは當分委員會に少くも一名の代表者を出し、總裁及び幹事は上記三國中の同一國に屬せざるべからず。

第十八條　フィンランド、ノルウエー及びスウエーデン委員は常務委員會を組織す。

委員辭任の場合は所屬國協會の指名せるもの之に代る

第十九條　各國の負擔すべき年額は會議毎に次期回に對するものを定む。負擔額は毎一月拂込をなすことを得。

年度は一月一日に初まり十二月三十一日に終る。

此はストツクホルムのカール・ノルデンソン氏より特に本會宛送られたものである。（加納一郎譯）

彙報抄録

穂高のクレツテライ

慶應山岳部の青木勝、佐藤久一郎、大賀道昊の三氏は七月七日、穂高連峯の仙人岩の岩壁を横尾谷より一五時間餘を費して登攀。同じく一三日、前穂高の北尾根（屏風連峯）を六時間にて登攀せられたる由。

北海道中央高地地形圖出版

北海道中央高地地形圖は從來、北海道廳發行の二〇万及

び五万分一圖ありたるが、信據するに足らず「山岳」附錄の小泉秀雄氏調査の地形圖また、同上二〇万分一圖を基本とせるもの故、誤り尠からざりしが、今回、參謀本部陸地測量部發行五万分一地形圖中、「旭岳」及び「ヌタクカムシコペ山の二枚新刊せられ從來の「ニペソツ岳」及び「十勝川上流」と共に北海道中央高地附近地形初めて明瞭となれり、而れども尚未だ石狩川上流奥山盆地附近未發行の爲め同方面に向はんとするものは、從來通り小泉氏の地圖にたよらざるべからざる有樣なり。

新刊二書

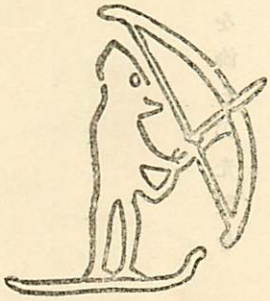
詩集　登高行　富田碎花作

詩人にしてアルペストリアンである氏の第四詩集である。收むる所「雪嶺禮讃」「山岳悲歌」「曠野詩集」「言葉」の四編二八章。「雪嶺禮讃」は著者が去る冬、北アルプスの上ノ岳に登れるときの作、「曠野詩集」は滿鮮紀行「山岳悲歌」は氏が幾度かの登高のえものである。眞に人の子として歌へる純乎たる山岳詩に乏しき本邦文壇に、今、此の著あるは洵に悅ばしい事である。

高山植物の話　武田久吉著

山岳家として、植物學者としての氏は今更紹介を要せぬ。新著は、著者が得意の寫眞版九〇餘個を入れ、挿圖また豐かにして、行文平易、植物の垂直的分布を說き、木本、草本にわたり、その形態、生理、生態を明かにせるものである。高山植物に特種の興味を有せざる人と雖も山に入るに當つて、常識として必要なる事柄が慈味深く記されてゐる。山地旅行の携帶に便なる樣裝幀されてゐる。たゞ惜しむらくは、寫眞印刷に於て原作の美を充分に移し傳へざるもの尠からざることなり。

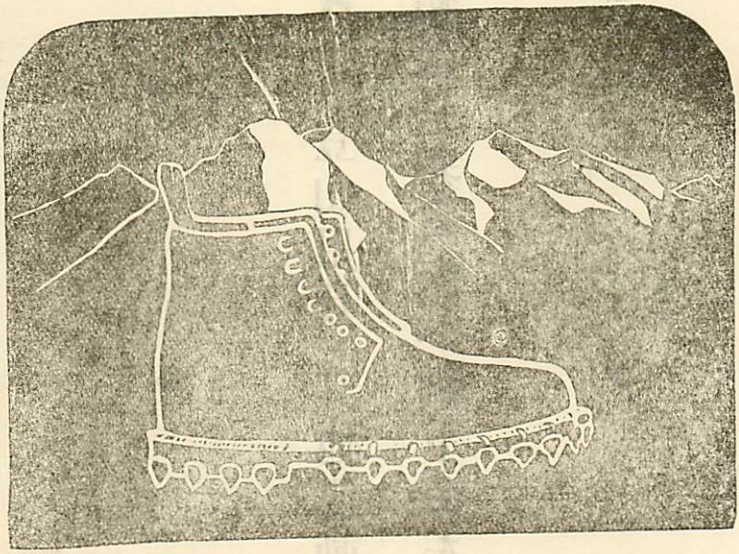
（かの生）



山岳紀行文

讀者諸兄今夏御旅行の收穫を以て誌面を飾るの光榮を給はらん事を乞ふ。原稿用紙御入用の向は御申越次第送呈致します。

編輯



登山靴とスキー靴

東京市本郷區四丁目角

太田屋靴店

電話小石川四七一二番

振替東京六一二七番

スキー・登山用具・其他運動
具類は是非當店へ御下命を

小樽市稻穂町大通

梅屋運動具店

電話九八六番　振替小樽七〇番

◆山とスキーの會は北海道帝國大學スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に趣味を持たるる方が一人でも多くお讀み下さることをお願いたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下されんことをお願します又印畫の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、、。を一字とし、行を更めるときは一字下げること。

◆記事中の數量は全て、C.G.S.係によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

定價　金參拾錢

＊前金御申込か、現金でなければお渡しいたしません。

＊御送金はなるべく振替にてお願致します。

＊六冊分前金拂込の方には送料を頂きません

＊前金の切れた時には最後の分の包裝にその旨記します。次の御送金あるまで配本を見合せます。

＊本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、緣故の有無にかゝはらず雜誌の代價は頂きます。

大正十三年八月三十日印刷
大正十三年九月一日發行
（毎月一回一日發行）

編輯兼印刷兼發行者　佐々木政吉

印刷所　札幌市北一條西二丁目　札幌印刷株式會社

發行所　札幌市北六條西六丁目　山とスキーの會
振替口座小樽八四九五番

大正十三年七月二十七日第三種郵便物認可
大正十三年八月三十日印刷納本
大正十三年九月一日發行

La Gazeto de la Monta kaj Skia Klubo

No. 41. Septembro. 1924. Sapporo. Japanujo.

MIMATSU MOUNTAINEERING OUTFIT

Patent Folding Camp Furnitures,
Folding Canvas Boats,
All Lines of Summer Sports Outfit.

Mimatsu & Co
Sporting Goods
店商津満美 名店
電話 845.2071
東京本郷赤門前
電話小石川

スキー 第四十一號

定價金參拾錢